

開催地名	愛媛県四国中央市
開催日時	令和6年1月20日（土） 10:00 ～ 12:00
開催場所	四国中央市消防防災センター
語り部	竹原 茂 （広島県三原市）
参加者	自主防災組織、市議会、市役所 52名
開催経緯	本市は山と海が近く、勾配のある土地に位置しており、土砂災害をはじめ、風水害の危険性を多く抱えている。幸いにも、平成16年以降大規模な災害は起きていないが、それ故に住民の防災意識が低く、台風がきても「この前も大丈夫だったから」と、多くの住民が災害を他人事として捉えている。市防災課および各地区の自主防災組織もそうした意識の低下からくる防災活動への参加率低下に頭を悩ませており、被災地での活動経験や、防災に向けた取組事例などをご講演いただき、今後の参考にしたい
内容	市民の命と暮らしを守るために ～あなたにとって防災とは～ （1）平成30年7月豪雨災害と三原市の被害について 2014年8月6日に防災士13人が自分たちの町は自分たちで守ろう！と、三原市防災士会を発足。三原市は海であった場所を干拓や埋め立てられてできた地域であり、ハザードマップからも「想定最大浸水区域」「津波想定浸水深」「液状化現象区域」であることが分かる。平成30年7月の豪雨災害時、県内各地では避難指示（緊急）が出るまでに21名が亡くなってしまった。大前提として避難警告を重く受け止めず、自身の自宅がそもそも土砂災害区域である事すらも知らない住民が多かった。 仮に認知できていたとしても、避難指示が出た段階で直ぐに行動に移し避難できるとは限らない。浸水や暴風が発生してしまっている場合は、少しでも早くに避難しなければならないのだが、そのためには常日頃から地域のハザードを知り行政と連携し繋がりを構築、避難訓練等の事前準備をいかに大切かと住民に浸透させるかが今後の課題である。 また我々、住民は『避難スイッチ』なるものを自分自身の中に作るべきである。河川の水位がここまで上昇したから逃げる。など常日頃から行政だけに頼らずに、自分で1次避難場所などを探しておく事や考えることが非常に大切である。誰とどこを通過して、どうやって避難するのか、などを実際にシミュレーションで通ってみる事も大事なことである。避難者自身で決め事を作るような訓練や、実際に理解していただき対策を立てさせなければマニュアルやハザードマップは役に立たない。 そのためにも、今後も三原市危機管理課へ積極的に防災意識について働きかけ、防災活動が続けていく。 （2）三原市防災ネットワーク 防災士ネットワークをはじめとして、13のネットワーク団体が参加しており、団体がそれぞれ特長ある活動をしている。例えば、避難所でどういう食材が使われているかなど、三原市のイベントに於いて一般の方に可視化している。

	また、地域の TV 局やラジオ局も含まれ、また河川のライブカメラの設置、LINE で市内各地の被災状況を共有できるシステムを構築している。他にも食事衛生管理（アレルギー食など）や精神障害の方に対する支援団体など、多岐にわたる分野のグループによって形成されており、毎月一回防災会議として連絡・協議・勉強会を続けている。その勉強会の一貫で地域学校や少年消防クラブなどとの合同防災訓練も様々な機会で行っている。 このようにして常日頃から防災について周知する機会を活用し、身を守るための知識や情報を常に発信し続けることに重きを置いて活動を行っている。 （３）避難所運営について 先に述べたように、避難所では女性目線でのキメ細やかな運営が大切と感じることが多いため、運営を続けていくには女性が副リーダーになってもらう必要がある。食事管理（食中毒対策や感染症）などの衛生面での問題を解決するためには、心配りができる女性の力が必要不可欠であるためだ。また避難所生活が長期になると、細やかな心のケアができる方（心療内科医師等）の存在も必要になってくる。男性より女性の方が適任である。 （４）まとめ 常日頃から災害について地域や行政と連携をし、市民自身も関心を持ち、防災力を高めておく必要がある。『平和の反対語は無関心』なのである。無関心は自分には関係ない、自分は被災しないという「正常化バイアス」である。 また防災システムについては、自分たちの地域で成るものでないといけない。地域の方々が自ら作り上げブラッシュアップしていかないと、いざという時に役に立たないためである。全員で協力して助け合いながら皆さんの命と暮らしを守れる地域作りをしていかなければならない。  
開催地より	講演会の中で竹原先生にお話しいただいたとおり、ハードルを下げた、幅広い世代が参加可能な「楽しみながら行える防災学習」の機会を増やすことが必要であると感じた。竹原先生の取組を参考にさせていただきながら、防災意識の向上に努めたい。